

昨郡富木に、前田利家を同郡菅原に置いて國政を分掌せしめた。然るに九年十一月信長は利家を能登一國の主としたから、利家は鹿島郡小丸山城に移つて、その城下を七尾と改稱し、長頼と行清とは國を去り、連龍は利家の興力として麾下に屬した。文祿二年利家は次子利政を能登に封じたが、その石高は詳かでない。思ふに口郡の内長連龍の興力領三萬千石及び後に利家が隱居領とする一萬五千石を除いた殘部であるまいか。慶長三年四月利家退隱して二十六萬石を養老封とし、その中に口郡一萬五千石があつた。利政の領を前述の通りとしたらば、この時鳳至・珠洲二郡は利家の長子利長の譲り受ける所となつた筈である。四年閏三月利家薨じ、口郡一萬五千石は利政の領に加へられた。五年十月利政は東軍を援けなかつた爲、徳川家康からその封を奪はれ、能登一圓は利長の領に歸したが、十一年からは同國內に幕臣土方氏の領邑一萬石が生じ、爾後それに種々の變遷がある。↓バクフリヨウ 幕府領。

ノトハタケヤマキ 能登畠山記 一冊。一名能州治亂覺書。畠山氏が能登の守護となつてから、その滅亡、長氏の苦闘、荒山及び石動山合戦までが叙してある。關左内の筆記であるといひ、左内の祖は長氏に仕へたものである。
ノトハツケイ 能登八景 元祿十二年の俳書能登登に能登八景として載せられてゐるのは、島山・松百・鉢ヶ崎・湧浦・饒石川・古城・女夫島・薄着崎屏風崎である。薄着崎とあるのは藻崎(石崎屏風)のことであらう。
ノトヒコジンジャ 能登比古神社 鹿島郡

上(部落名)に鎮座し、今能登部神社と稱する。式内等舊社記に、『能登比古神社。朝日庄能登部上村鎮座。古來稱「兒宮」。又云上宮。式外之舊社也。』と見え、文祿五年前田利家の興へた制札にも兒宮とある。又能登名跡志には、『上村、能登比古神社立給ふ。祭禮毎歲十月廿一日にて、同所愛宕の社へ御幸あり。此村に一樂といふ百姓ありて、此者二十日夜丑の刻に本社を開き、御神体を眞ひ奉り、後歩みに歩むこと也。今は略して草鞋をさかさまにはき歩む也。翌日愛宕の社にて祭禮あり。神主は清水氏也。石動山神主兼帶して此村にあり。一國の觸頭也。』と記してゐる。

ノトヒメジンジャ 能登比咩神社 鹿島郡能登部下に在る。式内等舊社記に、『能登比咩神社。式内一社。朝日庄内能登部下村鎮座。古來稱「妙天神」。或云。妙天神三穗天神之誤。舊傳云。比古比咩兩神鎮座。故往昔稱「邑名兒村妹村也。』とある。祭神は今ほ沼名木入姫命とする。社後の山に神廟と稱する地があり、文化九年之を穿つて石郭を發見したといふ。
ノトヒラカ 能登平笠 ↓カラストエノゴキ 穀捨の御器。

ノトベ 能登部 鹿島郡に屬する地名。承久三年注進の能登國田數目録に『能登部村、十町三段』とあり、大永六年十月の一宮社務米錢納帳にも能登部とある。能登部は能登部上村・能登部下村に分かれるが、上村は常に上村とのみ稱するに對して、能登部下村は却つて能登部とのみいふことがある。これ飯川村の隣邑に下村があつて、それと混同することを避ける爲であるといふ。又地方人は上村を兒村といひ、下村を妹村といふと傳へるが、

それは前者に能登比古神社があり、後者に能登比咩神社がある爲に附會するもので、實際部落にさうした名があつたわけではない。又能登比咩神社の社記に、下村を能登部比咩村と稱すといふも同じことである。能登部の語義に就いては、能登名跡志に『此所を能登部といふは、島國の時渡り口なりし故の名といへり。』とあるが、その意を明らかにせぬ。

ノトベ 能登部 藩政時代に能登部地方から金澤に出て雇傭せられる下男の類をいうた。加賀古跡考に、昔大野村の農家に、知らぬ男が來て、我は彌七というてよき男であるから召使つて呉れよと求めた話を書いて、その社に『これはの國の風俗なりけん。今も能登の外浦より船子・獵師など、冬季に向ひ隙になりぬれば、口を糊する爲に金澤等へ出で、知らぬ家に至り自らよい男でござる奉公人につかはれよといふものまゝあり。いづちの者とも知れず、名も定かならぬを、冬三ヶ月下部として召置く事、當國のならはしなり。世俗是を能登部といへり。寔に淳素の遺風といふべし。』とある。ノトベのべは下部の意であらう。下婢をベイヤといつたものと同じい。

ノトベシモ 能登部下 鹿島郡金丸保に屬する部落。能登名跡志に、『能登部下村、河合氏十村役あり。長樂寺とて密宗の大本寺あり。當國順禮十九番の札所也。』とある。
ノトベシモウシロヤマブン 能登部下後山分 鹿島郡金丸保に屬する部落。
ノトベジヨウ 能登部城 鹿島郡能登部下の山嶺なる館の尾といふ地であらうといはれる。得江文書應安二年十二月得江八郎九郎季員の軍忠狀に『今年四月廿八日以來至于六月

一日、於能登部城屬于吉見伊豫入道殿御手、日夜抽戰功畢。』とある。
ノトマチ 能登町 金澤の舊町名。大乘寺坂下の横町で、今は中本多町一番丁となつてゐる。町名の由來は不明である。
ノトマチ 能登町 金澤の舊町名であるが、今は絶えて詳かでない。十三間町の裏町であらうか。本多町に能登町の舊名があるが、それと異なつてゐる。

ノトミカゲ 能登御影 羽咋・鹿島二郡の境界なる碁石ヶ峰の岩石は、黒雲母花崗岩であるが、幾分の閃綠岩質を帶び、肉紅色の正長石・斜長石の斑晶と、石英の破片及び黒雲母とから成る。この石材は鹿島郡酒井で切出されて白石又は能登御影と名づけられてゐる。又石動山に産し、芹川原山分で伐出す黒雲母片麻岩も、同じく能登御影といはれる。
ノトミカン 能登蜜柑 能登で産した小形の蜜柑で、種子の多いものであつた。能登名跡志鹿島郡田鶴濱の條に、『此近郷は能登蜜柑の名物也。』とある。

ノトメイセキシ 能登名跡志 太田道兼の著で數種ある。何れも加賀の高松から能登に入り、外浦を経て三崎に出で、内浦通りを歸る間の名蹟舊跡を記し、その地の傳説をも載せる。その第一に能登名跡志一名能登名跡集は安永六年酉の立春日加陽金府太田氏某記の序がある。第二に能登巡と題するものには、安永六年丁酉孟春日加陽金府住文齋齋とある。第三に能登路記一名能登誌と題するものには、安永庚子月日太田道兼源頼資と記してある。
ノトメグリ 能登巡 二卷。金澤の俳人槐